

## 4 出土遺物

**鐘 楼** 土器類は明治時代の陶磁器と鎌倉時代から室町時代の土師器皿・瓦器碗が主体的で、少量ながら古代の須恵器を含む。瓦磚類は礎石建ち基壇建物としては瓦の出土量は多くない。また軒丸瓦はほとんどが中近世の巴文であり、創建期にさかのぼるとみられる軒瓦が1点あるほかは、胎土・焼成から古代のものとみられる破片が数点出土したにとどまる。焼失・再建のたびに片付けがおこなわれたためであろう。平安時代の軒瓦が出土した瓦廃棄土坑 SK11385 はそうした片付けにともなうものと考えられる。

**東金堂院西面回廊** 五重塔正面（625 次北区）では平安時代から鎌倉時代の土師器皿、瓦器碗が出土しているが、いずれも小片である。瓦磚類は出土量自体が少ないが、創建期にさかのぼる軒平瓦 6671A・E のほか、半肉彫で水波文をあらわす緑釉磚が出土した。

東金堂院西南隅（625 次南区）では、平安時代末頃から鎌倉時代にかけての土師器皿が比較的多く出土した。土師器皿や瓦器の年代にばらつきがあることから、盛土内に含まれていた土師器皿の可能性が高い。瓦磚類は中近世の軒瓦および刻印瓦が多数出土したが、西面南回廊 SC11440 の周囲や東西石組溝 SD11446 を埋積する土層からは奈良時代を中心とする古代の瓦がまとまって出土した。金属製品は銅製の小型の釘や鋌のほか、方形の垂木先金具片がある。

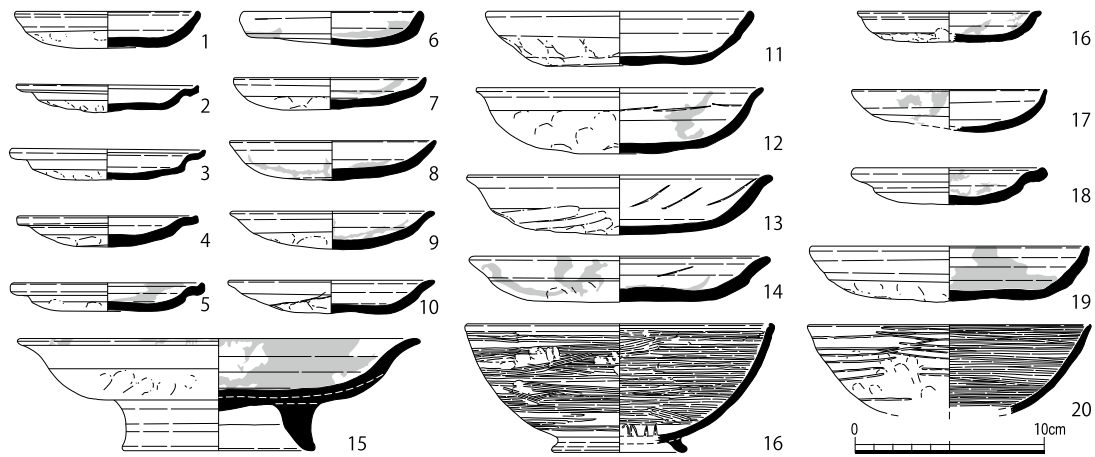
東金堂正面（640 次北区）で出土した土器類は、中近世の土師器が中心で、古代の須恵器・土師器を少量含む。遺物集積 SU11590 では、鎌倉時代前半の土師器皿が 12 個体以上出土しているが、完形近くまで復することができたのは 6 点のみであり、完形品と破片が混じった状態で廃棄されたものと考えられる。西面中回廊 SC11610 の上層西雨落溝 SD11597B の埋土から、鎌倉時代後半～室町時代前半の土師器皿と瓦器が出土した。瓦磚類は、西面中回廊 SC11610 の上層西雨落溝 SD11597B の埋土から、平安時代末～鎌倉時代初頭の鬼瓦が出土した。奈良時代の瓦では、興福寺式 6301 型式の新種が西面北回廊 SC11570 の上層西雨落溝 SD11581B の堆積土から出土した。他に、7 世紀後半から室町時代の瓦が出土している。金属製品は鉄釘が 43 点、鉄鋌が 1 点出土した。鉄釘は小片が多く、頭部の形状を確認できるものは少ない。

**南面築地塀** 640 次南区の土器類では、平安時代から室町時代までの土師器皿が主体的である。東西溝 SD11660 から鉄滓のような金属片が付着して被熱した須恵器杯 B が出土した。瓦磚類は、奈良時代から平安時代にかけてのものが主体である。京都円勝寺 ER019 と同範とみられる平安時代後期の瓦が出土した。銅製品は板状の飾金具の一種とみられるものが 1 点、風鐸の破片の可能性のある板状の銅製品 1 点出土した。2 点とも肉眼では鍍金の痕跡は視認できない。（垣中健志）

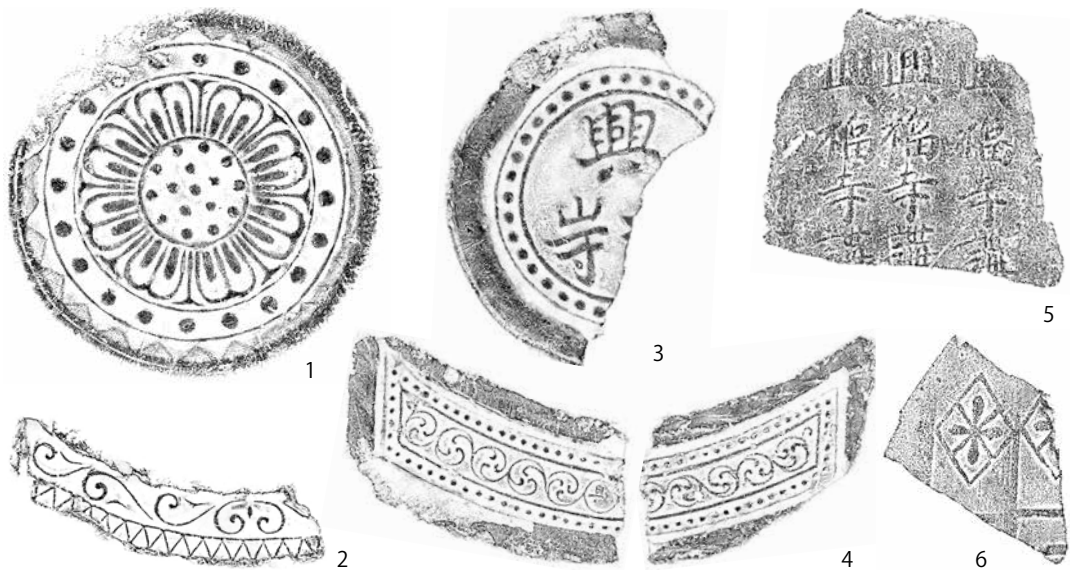
**東金堂院北面回廊** 649 次調査では中世の土師器皿を中心に整理箱にして 25 箱程度の土器・陶磁器類が出土した。ここでは遺構の時期に関わる土器類について述べる。北面回廊南雨落溝 SD11760 から大乗院編年（神野恵・尾野善裕「興福寺系土師器皿の編年」『名勝旧大乗院庭園発掘調査報告』奈良文化財研究所学報 97、2018 年）II-D 期（1140～1180 年頃）の時期の土師器皿（第 32 図-1）が出土した。東金堂院内庭からはまとまって廃棄された土器が出土した。これら土師器は灯明皿の痕跡をもつものが多い特徴がある。第 32 図-2～16 は土坑 SK11767 出土。2～5 はいわゆるての字状口縁になる土師器皿。薄手のものとやや厚手になるものがある。6～10 は小皿で、口縁端部が外反するものを含む（9・10）。11～14 は大皿。上段のナデが外反するものが主体的であるが（12～14）、直立するよう

にナデるものもある(11)。15は高い高台を付す皿。供物用の器種であろう。16は瓦器碗。これら土器の特徴から大乗院編年のⅡ-B期(1070~1110年頃)に位置づけられる。16~20は隣接する土坑SK11769出土。19は上段のナデが直立する大皿で、20は外面のミガキが形骸化しており、川越編年(川越俊一「大和地方出土の瓦器をめぐる二、三の問題」『文化財論叢』奈文研創立30周年記念論文集、同朋舎、1983年)の第Ⅱ期にあたる。すなわち、土坑SK11769はⅡ-B期(1070~1110年頃)からⅡ-D期(1140~1180年頃)程度の時間幅を有すると見てよからう。(神野 恵)

北面回廊から出土した瓦磚類の時期は創建期から近世にまで及ぶ(第33図)。奈良時代創建期の軒丸瓦6301A(1)と軒平瓦6671A(2)のほか、奈良時代中頃の軒平瓦6682D・Gも一定程度出土した。時代別では、平安時代の軒丸瓦、軒平瓦が多く出土しているが、文様は多様で建物の建て替えや屋根の葺き替えの時期を特定できる資料はない。そのほか、鎌倉時代再建期の興福寺銘軒丸瓦(3)、軒平瓦(4)が目立つほか、鎌倉時代の平瓦凸面に「興福寺講堂」銘のタタキ(5)、菱形花文のタタキ(6)を施したものがある。(今井晃樹)



第32図 649次調査出土土器 1:4



第33図 649次調査出土軒瓦 1:4